

旧本埜村の石仏・石碑探訪

蕨 由美

「本埜村」は大正2年(1913)に本郷村と埜原(やわら)村が合併成立し、平成22年(2010)3月印西市に編入合併した旧村で、本郷村は中世から続く台地上の龍腹寺など7か村、埜原村は近世以後の新田開発による印旛沼畔の14の新田で構成されていました。

この本埜地区には、水神社・鳥見神社・八幡神社・稲荷神社など神社25社、真言宗豊山派の密蔵院、曹洞宗の龍湖寺、天台宗の龍腹寺・東漸寺・福聚院・南陽院・栄福寺・安楽院・瀧水寺の7か寺と、今は地区集会所などになっている庵跡、城砦跡や墓地などがあり、旧村の景観とともに、中世から現代まで多くの石仏や石碑が残されています。その中から今回はムラの講に関わる石造物についてお話しします。

1. 庚申塔

庚申塔は、最も普遍的で数も多く、近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物である。庚申待は、六十日に一回庚申の夜に、眠った人間の体から三尸が抜け出し天帝にその人の罪過を告げられないよう徹夜するという道教に由来した信仰で、室町時代ごろから庶民にも浸透して庚申講が行われるようになると、その供養の証しとして「庚申塔」を建立する風習が、江戸時代、各地に定着した。

本埜地区でも、江戸時代前期から近代にかけて、多数の庚申塔が建てられ、その総数は281基を数える。うち、笠神の155基は、幕末と近代に建てられた2群の「百庚申」(後述)で、単独の庚申塔数は126基ある。

(1) 庚申塔の登場

中根の山林内で見つかった寛文二年(1662)銘の三猿像付き板碑型塔は、本埜地区で最古の年銘を持つ。銘文は「奉供養庚申待三年一座成就所/南无青面金剛」と当時の庚申待信仰の趣旨と主尊「青面金剛」の銘が明白に記され、浮彫りされた三猿像も寛文期初頭の優れた像容を残す。印西市では市内最古とされている寛文元年(1661)銘の竹袋観音堂の庚申塔に次ぐ。

近世庚申塔が定着していく寛文期初頭までの像容は、三猿や諸仏の彫像、文字のみの供養塔などさまざまな形態をとり、主尊も定まっていない。竹袋観音堂の台座に三猿が刻まれた聖観音立像もその一例であるが、やがて市内では、寛文十一年(1671)銘の小林の猿田彦神(砂田庚申堂)内の四臂の青面金剛像庚申塔が千葉県内でいち早く成立、それ以降は主尊の青面金剛像を浮彫りした典型的な庚申塔になっていくが、一方、三猿が主尊の庚申塔の建立も続けられる。

本埜地区2番目の庚申塔は、押付ヤシロ(水神社)の延宝三年(1675)の三猿塔、3番目は、貞享三年(1686)の物木庚申塚の青面金剛像塔である。物木では、ムラの入り口に築かれた堤状の庚申塚に江戸前期から幕末までの8基の庚申塔が並び、今でも壮観な姿を見せている。

なお、新田開発により成立した旧埜原村地区でも庚申塔の造立は早く、押付のほか、貞享四年(1687)には、中田切に青面金剛像塔が、酒直ト杭に三猿塔が建てられるなど、前期の本埜地区全体の庚申塔14基のうち10基を数える。

(2) 地域的な特徴を示す中期の庚申塔

その後、本埜地区をはじめ印西市を中心とした下総地域では、青面金剛像塔が数的にも最盛期になる江戸中期の享保から宝暦年間にかけて、その像容に画一的な特徴がみられるようになる。

享保三年(1718)銘の下曾根市杵島神社の像容にみられるように、主尊の目がいわゆるアーモンド形で、六臂のうち右手に鈴状または人身の頭部らしき袋状のものをもち、宝輪を持つ手が直角で水平に伸び、迫力が

ない邪鬼がうづくまる姿の特徴は、印西市から白井市や船橋市の東部、我孫子市・柏市・栄町に広がっている。

また三猿の意匠も、両端横向きで中央が正面向きの形がよく類似し、配置される台座や塔身下部のスペースにより、一列の平型、または三角型に配置する特徴がある。

享保三年（1718）銘の物木の庚申塚の三猿塔はこの三角型の初出である。また同庚申塚に宝暦四年（1754）に造立された庚申塔、中根の笠神古墳群中の寛延二年（1749）の庚申塔などは、この特徴を持つ青面金剛像の下に三角型に配置した三猿が刻まれた典型例である。

本埜地区でこの特徴を持つ庚申塔は、享保3年から宝暦6年（1718～1756）の22基中に17基あり、うち三猿のみは5基である。

（3）笠神社と蘇羽鷹神社の百庚申

庚申塔は、江戸中期には青面金剛像塔が定番化し、後期前半は「青面金剛」銘、文政期頃からは「庚申塔」銘の文字塔が主流となり普遍的な石造物として数多く建てられるが、北総及び印西市域の庚申塔群で特異なのは、江戸後期から近代にかけて建立された「百庚申」である。

本埜地区では笠神社に幕末の百庚申が、その近くに蘇羽鷹神社に近代の百庚申が、また印西市内では、武西・浦部・小林・松虫にも多石百庚申がある。

笠神社には、高さ45～60cm前後の画一的な駒型庚申塔が境内の左右に並んでいる。慶應元年～三年（1865～7）の三年間の年銘を持ち、数は青面金剛像塔17基、「庚申塔」銘の文字塔78基のほか、破損した廃石塔が5基あり、合わせて100基となる。

蘇羽鷹神社の百庚申は、駒型の「庚申塔」銘の文字塔54基と、青面金剛像塔6基の計60基で、百庚申には40基足りないが、60という数は干支の一周の数でもあり、また狭い境内に合わせた数であったと推測される。造立時期は、明治16年（1883）に8基、明治33年（1900）に19基・昭和10年（1935）に33基で、三次にわたって造塔が継続された。

（4）道標を兼ねた庚申塔

江戸後期以降の文字庚申塔には、道しるべが刻まれているものが15基みられる。

中根の本埜第一小裏門入口には文化10年（1813）の「青面金剛王／北笠神あじき／東よし田 成田江／西舟尾江戸江／たき村みち江」銘、滝の稲荷神社には文政9年（1826）庚申塔には「庚申塔／南たき さくらそうふけふなお道／北ひらおかこはやしものおきかさかみ道」銘がある。

万延元年（1860）の竜腹寺路傍三差路の庚申塔の左右側面には「右ハ／よしたか川岸よりなりた／せとかしよりさくら／道」「左ハ／かさかみ／小ばやし新田／道」と記され、往時の交通の状況を物語っている。

庚申塔が道標を兼ねた理由として、庚申塔の立地がムラの入り口の道路沿いや分岐に多いことと、庚申信仰に加えて、公共の利益のための行いがさらに功德を増すと思われたからであろう。

2. 月待塔と女人講の石塔

古来、闇夜を照らし、満ち欠けする月に対しては、特別な感情と信仰をもって眺めていたであろう。十五夜、十九夜、二十夜、二十三夜など特定の月齢の夜に、講の仲間が集まり、月の出を待ってこれを拝むことを月待（つきまち）という。念仏や経を唱えてお籠りする月待行事は、室町時代から文献史料にもみられ、江戸時代には飲食を共にする場ともなり、広く普及していった。

月待行事を行った講中で、その供養の記念として造立した石塔を月待塔という。関東各地には、特に十九夜塔と二十三夜塔が多くみられる。

十九夜塔を建立した十九夜講は、女人成仏を祈って如意輪観音を拝む女人講であったが、次第に安産・子育て・子授かりの祈願が主となり、江戸中期からは、徐々に子安像を刻む子安塔を建てるようになり、近代にはすべて子安塔に替わっていく。

本埜地区では、十九夜塔が71基、二十三夜塔が26基（うち1基は「二十六夜塔」を併せる）、子安石祠を含む子安塔が38基あり、そのほか、「講中」などの銘がないが、二十三夜講の供養仏の勢至菩薩塔が3基、十

九夜塔と推測される如意輪観音塔が5基、十五夜塔など稀少な月待塔が8基、その他の女人講供養塔が7基、銘不明1基あり、総計159基が月待講か女人講に関連する石塔である。

(1) 二十三夜塔

本埜地区の最古の月待塔は、物木の諏訪神社念仏堂跡の寛文八年（1668）銘の二十三夜塔で、優れた像容の勢至菩薩立像を刻む。

次いで、中根の釈迦堂跡墓地には寛文十年（1670）銘の勢至菩薩像塔がある。「奉修造勢至菩薩一尊為二世也／結衆三十一人中根村」の銘があり、二十三夜塔と推定される。

江戸後期からは、「二十三夜」と大きく銘文を刻む駒型や角柱型の文字塔が主流となる。中田切三区コミュニティセンターの天保十年（1839）銘二十三夜塔は流麗な文字上部に来迎する勢至菩薩像はいう浮彫りされている。

二十三夜講は、二十三夜の月の出も遅く、一般に男性の講、特に「若者中」主体である地域が多いが、本埜地区では江戸後期以降、女人講主体の二十三夜講が多い傾向がある。特に荒野の南之内二十三夜塔群には、江戸中期から近代までの女人講主体の二十三夜塔8基と二十六夜塔1基があり、そのうち江戸期の4基には道標銘が附記されている。

(2) 十九夜塔

関東北東部では、旧暦十九日の夜、女性が寺や当番の家に集まって、如意輪観音の坐像や掛け軸の前で経文、真言や和讃を唱える「十九夜講」が盛んに行われていたという。この十九夜講が、祈願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「十九夜塔」であり、如意輪観音像が主尊として彫刻される。

印西市域では寛文五年（1665）の小倉青年館の十九夜塔が、本埜地区では、寛文九（1669）年の中根の福聚院の六臂如意輪像塔が初出である。同じく寛文九年銘の笠神青年館（原堂）墓地の六臂如意輪観音像塔も、「十九夜」の銘はないが、「印西之庄笠神之郷同道四十三人」とあり、十九夜塔と推定される。両塔とも、主尊の顔立ちも女性的で美しく優れた像容である。

寛文期から正徳期までの江戸前期の十九夜塔は推定も入れて22基、特に延宝期の塔は9基を数えるなど、本埜地区は、北総でも早い時期から造立が盛んな傾向があるが、その理由として、十九夜塔発祥の利根川中流域にあり、また龍湖寺や瀧水寺など女人信仰の篤い寺や女人講が盛んな地区が多いことがあげられる。

如意輪観音像の像容は、寛文・延宝期の早い時期は丁寧な像容の六臂像が5点と多く、次第に定型的な二臂像のみになっていくが、正徳二年（1712）銘の安食卜杭の十九夜塔などは天衣の領巾（ひれ）を後ろに華やかになびかせる。

そして、宝暦五年（1755）行徳稻荷神社の「十九夜念仏講」造立の十九夜塔の主尊は、思惟相が如意輪観音の赤子を抱く子安像となり、以後、子安像塔へと次第に置き換わっていく。

(3) 子安塔

江戸中期までの十九夜塔に替わって、北総の女人信仰の石塔は江戸時代後期から徐々に、そして近代以降現代まで、そのほとんどが「子安観音」や「子安明神」の主尊を子安像として浮き彫りした子安塔となる。

酒々井町などの初期の子安像塔は、主尊が正面を向き肩と胸元に二人の小児を配する特徴を持つが、印西市域や栄町にも多く、中でも瀧の瀧水寺の安永五年（1776）「子安観世音」銘の子安塔は、今も美しい姿で祀られている。同様な像容は下曾根の市杵島神社の十九夜塔にもみられるが、十九夜塔で子安像を主尊とするのは、この市杵島神社塔と行徳稻荷神社の宝暦五年塔、「十九夜」の文字に子安像を小さく浮き彫りした瀧水寺の文政十年（1827）の角柱型塔の3基で、その後は「女人講中」銘の子安塔が多くなる。

子安像塔の数は、「十九夜塔」銘の3基も合わせると、江戸中期が4基、江戸後期が11基、近代が18基、現代が4基、不明2基である。なお、現代の最新は、安食卜杭の昭和六十二年（1987）銘の子安像塔である。

そのほか、本埜小林水神社の文久元年（1861）「子安観世音」銘の文字塔が1基、竜腹寺日枝神社の安永五年銘子安石祠がある。

(4) 十五夜・十七夜・二十夜(日)・二十六夜塔などの月待塔

その他の月待塔として、十五夜塔と十七夜塔それぞれ1基ずつ、二十夜塔と二十六夜塔が3基ずつ、その他2基がある。

十五夜塔は、物木諏訪神社念仏堂跡の天明八年(1788)「奉需十五夜當村講中」銘の文字塔である。

十七夜塔は、行徳の稻荷神社大日堂の元文五年(1740)「奉供養十七夜講中廿二人」銘の観音菩薩立像塔で、この観音像は来迎の際の阿弥陀像の脇侍のように、両手で蓮台を捧げ持つ像である。

二十夜塔は、物木諏訪神社念仏堂跡の寛文九年(1669)「二十日夜念仏供養」銘の十一面観音立像塔と、同所の明和元年(1764)「廿日構供養塔」銘の如意輪観音像塔などの3基である。

十七夜塔と二十夜塔はともに千葉県内でも数少なく、行徳の十七夜塔と物木の二十夜塔は、像容としても優れており貴重な石仏である。

二十六夜塔は、荒野の南之内二十三夜塔群の中に安永八年(1769)「奉待廿六夜講中／南ハいん〔 〕／西ハ(き)おろ(し)／女人講中」銘の道標付き文字塔と、中根の釈迦堂跡墓地の安永九年(1780)「奉建立廿六夜待供養」銘の地藏菩薩像塔(No.548)など3基がある。月齢二十六前後の月は三日月のように細く、東天に姿をみせるのは明け方に近い時間である。この月光の中に、弥陀・観音・勢至の三尊が見えるといつて、江戸では文化・文政期に月待信仰の名を借りた夜遊びがはやり、また本尊の愛染明王の名から染物業者に信仰されたという事例があるが、印西市内ではその様な傾向はみられず、二十三夜講と併行、また不分離な念仏講であったと推測される。

3. 仏像供養塔

仏像供養塔は、大日如来・釈迦如来の如来像塔と、地藏菩薩・如意輪観音菩薩・勢至観音菩薩・馬頭観音菩薩などの菩薩像塔のほか、不動明王像などの明王像塔、弘法大師像などの祖師像がある。本埜地区では、十九夜塔主尊の如意輪観音像、二十三夜講の勢至菩薩像、亡者を導く供養仏の地藏像、馬の供養目的の馬頭観音塔などが多い。大日如来像塔は念仏講の主尊として5基、地藏菩薩像塔は74基、うち半数は六地藏塔である。馬頭観音塔は26基、不動明王像塔が5基ある。

(1) 大日如来像塔

大日如来は「大いなる日輪」という意味の毘盧舎那如来がさらに進化した仏で、密教では宇宙を指し、すべての命あるものは大日如来から生まれたとされる。

大日如来には悟りを得るための智慧を象徴する金剛界と、無限の慈悲を象徴する胎蔵界いう二つの捉え方があり、二つ揃って密教の世界観が構成されている。金剛界大日如来は智拳印、胎蔵界大日如来は定印を結ぶ。如来像は出家後の釈迦の姿で装飾品は身に付けないが、大日如来像は別格で装飾や宝冠を付け、結髪する。

本埜地区の大日如来像塔は、墓塔を除くと5基で、うち念仏塔が4基である。

中根の戸崎観音堂の大日如来像塔は、明和五年(1769)「奉建立齊念佛供養善男女／同行七十九人／」銘で、「念佛頭 願主」として中根村2名の名があり、像は引き締まった躯体に凜とした表情で、智拳印を結ぶ。「時念仏」とも書かれる「齊念佛」の「齊(とき)」とは、法会の際の僧侶の食事をさし、仏と飲食を共にすることに特別な意味をもつ念仏講が行われていたと推察される。

押付の薬師堂は安永八年(1779)「念仏供養押付講中十五人」銘。ともに金剛界の定印を結び静かな瞑目する坐像の念仏塔である。

(2) 地藏菩薩像塔

地藏菩薩釈尊は、釈迦の入滅後、弥勒菩薩が現れるまでの無仏時代の衆生を救済することを釈迦から委ねられたとされ、サンスクリット語で「クシティガルバ」、即ち「胎内」大地や意味し「地藏」と訳されたという。

大地が全ての命を育む力を蔵するように、苦悩の人々を、その無限の大慈悲の心で包み込むことから中世から石仏として最も親しまれ、また、中国の十王思想で「地藏王菩薩」として閻魔大王と同一との信仰により、死者の救済のため霊界との境に多く建てられた。

一般には剃髪した僧侶の姿で袈裟を身にまとう。左手に如意宝珠、右手に錫杖を持つか与願印をとる像が多い。光背型のほか、台石上高く祀られた丸彫像も多いが、地震などで損傷し分離しやすく、完形で残っている丸彫塔は貴重である。

地蔵菩薩の像を6体並べて祀った六地蔵像は、道輪廻の思想に基づき、六道のそれぞれを6種の地蔵が救うとする説から生まれたもので、寺院や墓地入り口に多くみられる。1体ずつ6基1セットがほとんどであるが、一石に6体並べたもの、2体ずつ3基セットのものほか、6体を灯籠や石幢の刻んだものもある。

供養の目的は、念仏講や女人講や、「三界万霊」のための共同で立てたもののほか、特定の故人の菩提のためグループ、または個人で立てたものが多く、時に子供の墓塔として建塔されている。

その他に、江戸中期に限られた「花見堂地蔵」像があり、子供主体の行事に大きくかかわった地蔵像あったと考えられている。

本埜地区では、記録した地蔵像塔は74基、うち六地蔵塔は39基、花見堂地蔵像塔が3基、女人講造立塔が2基、廻国塔が2基、その他おびただしい墓塔がある。

① 単独の地蔵像塔

本埜地区の地蔵像塔では、中根東漸寺の延宝七年（1679）銘の光背型塔が初出であるが、銘文が読めず、その目的は不明で墓塔の可能性もある。

笠神の南陽院には享保十二年（1727）銘の丸彫りの延命地蔵坐像塔、同じく笠神の向公会堂には享保十八年（1727）銘の丸彫りの地蔵立像塔がある。

両塔とも「日本回國」の銘がある廻国塔で、廻国塔とは日本全国六十六部を廻国巡礼した記念の供養塔である。南陽院の塔は、三故人と「三界万霊有縁無縁」の供養塔を兼ね、像容も良く貴重である。

中根の戸崎の宝暦八年（1758）銘の光背塔は台石に21名の女性名があり、女人講の造立と推測される。

物木の龍湖寺の明和四年（1767）年銘の丸彫塔は、14人の戒名の被供養者と7名の供養者、龍湖寺住職の名があり、「諸願成就」の願文が彫られている。

将監の密蔵院の三界萬霊塔は、宝珠をもって飛雲に乗り来迎する姿の地蔵菩薩像が角柱塔上部に浮彫されている。明和五年（1768）年「三界萬霊奉／建立地蔵菩薩／想若者中」（「想」は「惣」か）の銘がある。「三界万霊」とは、欲界・色界・無色界に存在するすべての霊を意味し、その安樂を祈願する。

② 六地蔵塔

本埜地区の六地蔵塔は、1体一石が5セット計30基、2体一石が2セット5基、1ずつ6体6面の石幢と2体3面の石幢が各1基ある。

物木龍湖寺参道の正徳二年（1712）銘の六地蔵塔は、願文などの銘文が苔の不鮮明であるが、6体揃う姿は江戸前期の石仏として貴重である。

明和三年（1766）と寛政三年（1791）銘がある角田栄福寺の六地蔵塔は丸彫塔である。

中の八幡神社の六面石幢は嘉永三年（1850）銘があり、笠部を失っているがにこやかな優れた像容を残す。

荒野コミュニティセンターの大正十二年（1923）銘の笠付角柱型塔は三面に各2体を浮彫した優れた塔である。

また龍腹寺仁王門前の宝永四年（1707）銘石灯籠1対の右側灯籠竿部には六地蔵像が、左側には六観音像が陽刻されている。

③ 花見堂地蔵塔

花見堂地蔵とは、合掌型地蔵像の光背に「花見堂」などの銘、造立日が宝永～文化年間で三月三日や三月吉日が多く、「童男童女」「子供中」などの子供に関わる銘がある小型の地蔵塔である。印旛沼北西部に26基と関連が検討中の10基、それに先行するさいたま市内など10基が報告されている。おそらく旧暦の3月子供主体に地蔵様を祀り飲食した行事であったろうと推定されるがその実態は不明である。

本埜地区では和泉屋氷川神社の享保十八年（1733）「童男童女華見堂」銘の地蔵像塔のほかに、中根 903-2 丁字路路傍に「花見堂地蔵尊」の銘の地蔵像塔2基がある。中央の無銘の延命地蔵立像の両脇2基の花見堂地蔵は、右が総高82cmで合掌する地蔵像の浮彫り、銘は「花見堂地蔵尊／寛延二己巳三月三日／同行十人」。左は総高88cm、宝珠と錫杖を持つ地蔵像の浮彫りで、銘は「奉供養花見堂地蔵尊／（梵字カ）／宝暦十庚辰天

三月三日」である。

(3) 馬頭観音塔

馬頭観音は変化六観音のひとつで、その像は憤怒の相が多く、衆生の無智・煩惱を排除し諸悪を毀壞する菩薩として信仰されたが、民間信仰ではその「馬頭」という名から馬の守護仏、さらにすべての畜生類を救うとされて、その石仏の多くは路傍やソウマンド（馬・動物の墓）に供えられる。

本埜地区では、安永7年からの刻像塔が8基、文政10年以降の「馬頭観世音」銘の文字塔が18基、計26基がある。

滝390地先の塚には、享和三年（1803）銘の刻像塔を中心に計7基の馬頭観音塔が並んでムラ境の馬頭塚を形成し、同塚上の安永七年（1778）銘の刻像塔は、本埜地区最古の馬頭観音塔である。

本埜小林墓地の天明三年（1783）銘塔は小林新田のムラによる造立であるが、竜腹寺の道六神前の辻の文化三年（1806）銘塔に「世主文左右門」と記されるように、馬頭観音塔は次第に飼っていた馬を供養する個人による造立がほとんどとなる。

4. 富士講関連の石造物

本埜地区では、近世・近代の富士講が関連する石塔が多数ある。古来、富士山は、神霊が宿る高山として、また同時に恐るべき噴火山として、崇拜畏怖された特別な信仰対象であった。中世に噴火が鎮まると、修験者による修業としての登拝が可能となり、近世になると開祖の長谷川角行や食行身禄らの行者の荒行とその験力、教えが一般の人々に広められ、後継者によって関東各地に富士講の「代参講」が組織されて、爆発的に富士信仰が流行した。

代参講は、数年間を単位に、地域の先達・講元・世話人の役職と講員数十名によって組織される。講員は、講を代表して輪番で1回は登拝でき、その代参費用は月並講などで集めて積み立てられた講費が充てられる。

各地の代参講は、角行の後継者の法脈から約百数十の流派があり、房総では山水講、山包講や丸不二講などが盛んで、それぞれの「笠印」を持つ。先達は、上吉田の御師から許された「行名」を名のり、三十三度以上の登拝を成就した先達は「大先達」と呼ばれ、尊敬された。また三役と講員で毎月一回拝みを行う「月並講」も開かれていた。

本埜地区の富士講関連石造物の最古は、滝白山神社の延享二年（1745）「富士浅間宮／講中」銘の石祠で、竜腹寺浅間神社の明治十二年（1879）「仙元神社」銘石祠まで、各地域の寺社境内に8基の富士信仰の石祠が建てられている。

笠神の浅間神社に明治十四年（1881）富士講中による石祠が奉納された後は、笠神浅間神社を本埜地区の拠点として、富士講が組織的に展開されていく詳細が同神社の石造物でわかる。明治十九年（1886）の「磐長姫命」銘の神塔が「月並講」により建立、明治二十年（1887）銘碑から昭和二十三年（1948）年銘碑までの6基の大型の富士講碑、「食行身禄尊師」銘塔、「御室仙元大士」銘塔の計9基があり、特に、明治二十年銘碑は北須賀村の先達「小川北行」の「登山三十三度大願成就」を、明治三十七年（1904）銘碑は笠神區の先達「長行真山」の「三十五度大願成就」を記念し、笠神と本埜地区だけでなく印西市域内外におよぶ「山包講」の地域的な連携とその活動の盛況を伝えている。

また笠神以外の各ムラでも、和泉屋新田氷川神社の大正十年（1921）「大願成就／木行平月／おこたらず誠の道を辿りつゝ神のみしるしとはにあおがん」銘の石祠など、近代の富士講関連の興味深い石造物がみられ、以上、本埜地区の富士講石造物は、富士講碑は14基、石祠9基、神塔2基の計24基を数える。

5. 印西大師新四国霊場巡礼に関わる石造物

本埜地区に特徴的に多いのは、弘法大師石像、弘法大師供養塔（「南無大師遍照金剛供養塔」）など、印西大師八十八か所新四国巡礼に関連する石造物である。

印西大師新四国霊場は、昭和十年（1935）に建てられた笠神の南陽院の勸請記念碑によれば、南陽院の臨唱法印が享保6年（1721）に四国霊場から勸請して創設、その後天保元年（1830 碑文では「文政十三年」）

南陽院の孝祐法印が再興し、88 札所に弘法大師石像を配したという。その範囲は、印西市全域と一部白井市域におよび、札所は 88 か所のほか番外 70 か所ほどあり、おおよそ 160 か所を巡行している。

創設当時は、弘法大師の霊力にあずかり、水害や飢饉の苦しみから逃れ、同時に、死者の供養、自身の健康長寿を祈念した巡礼で、利根川下流域では、最も古い四国霊場写しであった。

印西大師の特徴は、先達寺の南陽院(笠神)、来福寺(平賀)、廣福寺(師戸)の 3 か寺が交代で出発と結願寺を受け持つことで、現在は、毎年 4 月 1 日から 6 日間行われている。なお、南陽院は天台宗、来福寺と廣福寺は真言宗豊山派である。

本埜地区の札所の数は重複も入れると、28 か所で、そのうち 15 か所が番外である。

各札所には複数の弘法大師石像が、また巡礼の拠点となった地域には、「小廻組合」の弘法大師供養塔（「南無大師遍照金剛供養塔」）、また 3 基の霊場標石が 2 か所に建立されている。

なお、将監の密蔵院と安食ト杭青年館（覚了庵）の札所は、河内郡・北相馬郡・下埜生郡・印旛郡の旧下総国四郡にまたがる「四郡大師」（別称:布川組八十八ヶ所）の札所でもある。

(1) 弘法大師坐像塔

弘法大師は、真言宗開祖の空海の 921 年追贈名で、金剛名号は「遍照金剛」である。本埜地区の弘法大師像は、「印西大師新四国霊場」の巡礼札所の小堂内に祀られている小型坐像の 15 か所の札所の 40 体である。

年銘が残る最古は、印西大師再興の文政十三年（1830）銘、行徳稻荷神社の銘石像、続いて下曾根市杵島神社の嘉永五年銘石像で、江戸期の印西大師の再興の記録として重要である。他に年銘が有るのは、明治十九年（1886）佐野屋墓地の弘法大師像と、昭和～平成期 4 体。他の石像 33 体は無銘である。

(2) 弘法大師供養塔（「南無大師遍照金剛供養塔」）

本埜地区には、「南無大師遍照金剛」の銘の角柱型塔が 18 基あり、うち 15 基が先達の笠神南陽院・小林西福寺・萩原竜泉寺三か寺銘のある印西大師の供養塔である。

行徳稻荷神社の明治十三年銘塔は、笠付き角柱塔の上部の石龕内に丸彫りの小さな弘法大師石像を置き、先祖の霊を供養する。安食ト杭青年館の明治二十八年（1895）塔も角柱塔の上部に弘法大師像を小さく浮き彫りしているが、この明治二十八年銘塔から荒野コミュニティセンターの大正十一年（1922）銘塔まで 5 基には印西大師先達三か寺の銘、そして押付薬師堂の昭和四年（1929）銘塔から滝瀧水寺の昭和三十九年（1964）銘塔までの 8 基には、先達三か寺に加え「小廻組合」の銘があり、昭和期に印西大師巡礼のため「小廻組合」が組織化されたと推測できる。

なお、大正十一年銘塔には、9 地区 220 人の氏名があり、近代における印西大師の盛況を伝えている。

(3) 新四国八十八か所霊場標石

新四国八十八か所霊場の札所であることを示す霊場標石が 3 基あり、各札所が勧請元の四国八十八ヶ所霊場の何番札所の写しであることを示している。

最古は天保二年（1831）酒直ト杭水神社の標石で、「土佐國定山奥院寫」の銘がある。「定山奥院」の「定山」は佐田山（＝蹉跎山）、そして「奥院」は佐田山の白皇権現で、四国 38 番札所「蹉跎山金剛福寺」の奥の院であったが、明治初年の神仏判然令で佐田山神社となり、現在は白山神社になっている。

酒直ト杭水神社には、明治五年（1872）の「第六十五番／豫洲三角寺写」の銘のある標石がある。

また中田切三区コミュニティセンターには、同明治五年銘の「第三十三番／土州高福寺写」銘の標石がある。この高福寺とは土佐の 33 番札所「雪蹊寺」のことで、鎌倉時代以前の古称である。廃仏毀釈で廃寺となり、明治 12 年に雪蹊寺が再興されるまでの間、31 番竹林寺で「高福寺」の名で納経されていたという。

これらは、明治初頭、神仏分離令直後の混乱期の四国札所の実態を知る重要な石造物である。

☆太字の石造物の写真は、スライドでご紹介します。